

[資 料]

小児病棟実習前後における学生の こどもに対するイメージの変化について

— 受け持ち患児の年齢, 実習病院, 学生の不安・認識の違いより —

古谷佳由理 内田 雅代 兼松百合子
武田 淳子 丸 光恵

Changes of Student's Image of Children before
and after Child Nursing Practicum
— Age of Children, Hospitals of Nursing Practice,
and Anxiety and recognition of Students —

Kayuri FURUYA, Masayo UCHIDA, Yuriko KANEMATSU,
Junko TAKADA, Mitsue MARU

要 旨

C大学看護学部4年次学生に対して, 小児病棟実習前, 後に「こどもに対するイメージ」について調査を行い, 受け持ち児の年齢, 実習病院の特徴, 学生の不安や認識から分析を行った。その結果, 実習を通して全体的に学生のこどもに対する肯定的なイメージは強い方向に, 否定的なイメージは弱い方向に変化していた。実習後のこどもに対するイメージの違いには, 学生が受け持った児の発達段階が反映されていた。付き添いのない実習病棟では父親の存在の感じ方が弱い方向に変化していた。実習前に学生は受け持ち児やその母親との関わりに不安を感じており, 受け持ち児との関わりに不安を感じていた学生はこどもに対する否定的なイメージが強かった。また, 受け持ち児との関わりが困難と感じた学生はそうでない学生よりこどもの否定的なイメージが強かった。

Key words; Child Nursing Practicum
Image of Children
Anxiety and recognition of Students

I. はじめに

こどもをどのようにとらえ, どのように対応しようとしているかというこども観は, 小児看護を学ぶ上で非常に重要である。少産化, 少子化が

特徴となっている現代社会において, 学生はこどもと実際に関わる機会が少なく「これくらいのこどもと接するのが初めてなので, どのようにしたらよいかわからない」という言葉を聞くことも少なくない。

われわれは, これまでも学生がこどもをどのようにとらえているのか, また実習による影響はどのようなものなのかに着目し, こどもに対するイメージとして本学部紀要11号, 15号に報告した^{1, 2)}。

千葉大学看護学部母子看護学講座小児看護学教育研究分野

Department of Parent and Child Nursing,
Child Nursing, School of Nursing, Chiba
University

小児看護学教育研究分野では、平成4年度より小児病棟実習を入院体制の違う2つの病院で行っており、学生は母親の付き添いのある大学病院か母親の付き添いのない小児専門病院のどちらか一方で小児病棟実習を行う。今回、小児看護実習を効果的にすすめる上でひとつの指標となる“学生のこどもに対するイメージ”について、受け持ち患児の年齢や家族の付き添いの有無による違い、こどもとの関わりに対する実習前の学生の不安や実習後の学生の認識について考察、検討を行った。

II. 研究方法

平成4年度・5年度のC大学看護学部4年次学生164名に対し、研究の趣旨を説明し同意が得られた160名を対象に、小児病棟実習（以下実習とする）前、後にこどもに対するイメージについて質問紙により調査を行った。質問紙の内容は、前回の「こどものイメージ」の40項目について因子分析を行った結果、各因子をよく説明していた32項目を抽出し、また同時に調査した「母親・父親についてどう思うか」「病気のこどもについてどう思うか」の自由記述の結果をもとに8項目を選択し、表2に示した計40項目とした。更に、実習中に学生が直接関わりを持つこどもや母親、指導教官などについて実習前にはそれらの人との関わりに対する不安の程度を、実習後には関わりの難しさの程度を問う項目を追加した。各項目については5段階の選択肢を設け、“非常にそう思う”を5点～“全く思わない”を1点（ α 係数=0.87）とした。また実習で受け持ったこどもの性別や年

齢、疾患等についての資料を用いた。分析には統計パッケージHALBAUを用いた。

III. 結 果

1. 受け持ち児の背景

受け持ち児の性別は男児92名、女児68名であり、年齢群では1～3歳の幼児前期が50名と最も多く、次いで0歳の乳児が45名、7歳以上の学童が34名、4～6歳の幼児後期が31名で、平均年齢は3.8歳であった（表1）。性別、年齢において実習病院による差は認められなかった。疾患は悪性疾患40名、循環器疾患29名、脳神経系疾患25名、小児外科疾患24名、その他の外科系疾患25名、その他の内科系疾患13名であった。

2. 実習前、実習後のこどもに対するイメージの特徴について

実習前、実習後のこどもに対するイメージ得点の平均点と標準偏差を表2に示した。実習前後とも「全く思わない」「あまり思わない」と答えた学生は少なく、平均点が3点未満の項目は、実習前では「こわい」「苦手」「嫌い」「病気のこどもはおとなしい」の4項目であり、実習後では実習前の4項目に「こどもといると疲れる」を加えた5項目であった。

3. 実習前後のこどもに対するイメージの各項目の変化について

表2にこどもに対するイメージについて実習前と実習後の各項目の平均値の差の検定を行った結果を示した。実習後の得点が実習前の得点よりも有意に高くなったものは「年齢によって全く違う」

表1 実習病院別に見た学生の受け持ち患児の年齢群と性別

(人)

年齢群 性別 実習病院	0 歳 (乳 児)		1～3 歳 (幼児前期)		4～6 歳 (幼児後期)		7 歳～ (学 童)		合 計
	男 児	女 児	男 児	女 児	男 児	女 児	男 児	女 児	
大 学 病 院	11	11	14	9	11	6	8	10	80
小児専門病院	11	12	17	10	11	3	9	7	80
小 合 計	22	23	31	19	22	9	17	17	
合 計	45		50		31		34		160

表2 実習前後のこどもに対するイメージ得点の平均点と標準偏差と平均値の差の検定結果

イメージの項目	調査時期	実 習 前 n = 160	実 習 後 n = 154	平均値の 差の検定
こどもはかわいい		4.44±0.62	4.62±0.50	< **
こどもは生き生きしている		4.45±0.61	4.34±0.69	
こどもは素直		4.11±0.76	4.28±0.79	
こどもは敏感		4.43±0.60	4.52±0.62	
こどもはわがまま		3.90±0.71	3.68±0.89	> **
こどもは小さい		4.01±0.79	3.83±0.88	> *
こどもは真似が上手		3.42±0.87	3.52±0.90	
こどもは意外な行動や考えを持っている		4.16±0.78	3.92±0.88	> **
こどもは興味、好奇心が旺盛		4.54±0.59	4.38±0.68	> *
こどもは集中している時間が短い		3.84±0.92	3.85±0.90	
こどもは感情がはっきりしている		4.08±0.84	4.18±0.83	
こどもは気分が変わりやすい		3.89±0.84	4.20±0.78	< **
こどもは年齢よって全く違う		4.17±0.90	4.57±0.64	< ***
こどもはこどもなりの意志や考えを持つ		4.47±0.67	4.50±0.55	
こどもは遊びが大好き		4.44±0.65	4.58±0.56	< *
こどもには想像力がある		4.22±0.62	4.11±0.71	
こどもは愛情を持って接すると通じる		4.19±0.75	4.38±0.69	< **
こどもは大人が導く必要がある		3.36±0.85	3.50±0.85	< *
こどもが好き		4.08±0.92	4.35±0.74	< ***
こどもは楽しい		4.03±0.86	4.31±0.73	< **
こどもはおもしろい		4.20±0.81	4.35±0.70	< *
こどもはうるさい		3.84±0.81	3.38±1.05	> ***
こどもはこわい		2.56±1.11	2.47±1.22	
こどもといると疲れる		3.18±0.98	2.77±1.05	> ***
こどもは苦手		2.55±1.00	2.23±0.94	> ***
こどもは嫌い		1.93±0.84	1.68±0.74	> **
こどもの笑顔にほっとする		4.22±0.76	4.55±0.70	< ***
こどもが泣いているとどうしていいかわからない		3.31±1.03	3.04±1.04	> **
泣いているこどもは何か訴えている		4.22±0.64	4.43±0.66	< **
こどもに嫌われたら困る		3.55±1.07	3.40±1.02	> *
こどもに嫌われてもまたトライしてみる		3.70±0.75	4.13±0.69	< ***
こどもがいるとまわりが明るくなる		4.05±0.71	4.15±0.75	
こどもにとって母親はかけがえのない存在		4.83±0.38	4.79±0.41	
こどもにとって父親はかけがえのない存在		4.57±0.58	4.38±0.66	> **
こどもにとって母親は大きな存在		4.86±0.35	4.84±0.36	
こどもにとって父親は大きな存在		4.59±0.64	4.46±0.65	> *
病気のこどもはかわいそう		4.31±0.70	4.08±0.87	> **
病気のこどもはがんばっている		4.31±0.63	4.42±0.68	
病気のこどもはおとなしい		2.70±0.76	2.31±0.89	> ***
入院しているこどもは遊べずかわいそう		3.78±0.86	3.51±1.08	> **

非常にそう思う：5点 まあそう思う：4点 どちらともいえない：3点

あまりそう思わない：2点 まったくそう思わない：1点

t検定またはWelchの検定：* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$ *** $P < 0.001$

「こどもに嫌われてもまたトライする」「好き」「こどもの笑顔にほっとする」など12項目、低くなったものは「うるさい」「こどもといると疲れる」「苦手」「嫌い」など15項目であった。また、母親や父親については、父親に対する項目で実習後の得点が実習前の得点よりも有意に低くなっていた。

4. 受け持ち児の年齢とこどもに対するイメージについて

受け持ち児の年齢を0歳、1～3歳、4～6歳、7歳以上の4群に分け、一元配置分散分析を行い、有意な差が認められた項目を表3に示した。実習前は「集中している時間が短い」（1～3歳と7歳以上間 $P<0.05$ ）「入院しているこどもは遊べなくてかわいそう」（1～3歳と7歳以上間 $P<0.05$ ）の2項目に年齢による差が認められたが、実習後は「真似が上手」（0歳と1～3歳間 $P<0.01$ ）「嫌われたら困る」（1～3歳と7歳以上間 $P<0.01$ ）「遊びが大好き」（0歳と4～6歳間 $P<0.05$ ）など5項目に差が認められ、実習前に差が認められた2項目には差が認められなくなっていた。

実習後の各項目の得点から実習前の得点を引いたものを実習前後の変化として再得点化し、患者の年齢の4群において有意な差が認められた項目は「真似が上手」（0歳、7歳以上と1～3歳間 $P<0.01$ ）「興味・好奇心が旺盛」（1～3歳と7歳以上間 $P<0.05$ ）「気分が変わりやすい」（1～3歳と7歳以上間 $P<0.05$ ）の3項目であった。

5. 付き添いの有無別に見た学生のこどもに対するイメージについて

家族の付き添いのある病院で実習を行った学生（以下付き添いあり群）80名と、付き添いのない病院で実習を行った学生（以下付き添いなし群）80名のこどもに対するイメージを表4に示した。

実習前後で付き添いあり群にのみ有意な差が認められた項目は「わがまま」「遊びが大好き」「愛情を持って接すると通じる」「嫌い」「病気のこどもはかわいそう」「入院しているこどもは遊べなくてかわいそう」の6項目、また付き添いなし群にのみ有意な差が認められたものは「小さい」「興味・好奇心が旺盛」「おもしろい」「こどもにとって父親はかけがえのない存在」「こどもにとって父親は大きな存在」の5項目であった。

表3 受け持ち児の年齢によるこどもに対するイメージの違い

イメージの項目 患児の年齢		真似が上手	興味・好奇心が旺盛	集中している時間が短い	気分が変わりやすい	遊びが大好き	想像力がある	嫌われたら困る	病気の子は、かわいそう	病気の子は、遊べずかわいそう
実習前	0歳 (n=45)			3.82						3.64
	1～3歳 (n=50)			3.66						3.54
	4～6歳 (n=31)			3.77						4.00
	7歳～ (n=34)			4.21						4.12
実習後	0歳 (n=45)	3.16				4.40	4.00	3.38	3.96	
	1～3歳 (n=46)	3.83				4.65	3.93	3.07	4.17	
	4～6歳 (n=29)	3.62				4.79	4.45	3.45	3.79	
	7歳～ (n=34)	3.49				4.56	4.21	3.82	4.38	
実習前後の変化	0歳 (n=45)	-0.36	-0.27		0.24					
	1～3歳 (n=46)	0.62	0.09		0.65					
	4～6歳 (n=29)	0.24	0.03		0.17					
	7歳～ (n=34)	-0.18	-0.41		0.03					

一元配置分散分析 * $P<0.05$ ** $P<0.01$

表4 実習病院別に見た実習前後のこどもに対するイメージ得点の平均値と標準偏差と平均値の差の検定結果

実習病院		大学病院（付き添いあり）			小児専門病院（付き添いなし）		
イメージの項目	調査時期	実習前 n = 80	実習後 n = 80	平均値の 差の検定	実習前 n = 80	実習後 n = 74	平均値の 差の検定
こどもはかわいい		4.39±0.64	4.61±0.49	< **	4.50±0.59	4.63±0.51	< *
こどもは生き生きしている		4.39±0.58	4.35±0.65		4.51±0.63	4.34±0.72	
こどもは素直		4.05±0.81	4.28±0.81		4.18±0.70	4.22±0.78	
こどもは敏感		4.40±0.60	4.53±0.57		4.46±0.59	4.51±0.66	
こどもはわがまま		3.91±0.60	3.61±0.83	> **	3.89±0.73	3.74±0.95	
こどもは小さい		3.81±0.71	3.74±0.86		4.20±0.82	3.93±0.89	> *
こどもは真似が上手		3.48±0.88	3.57±0.84		3.36±0.86	3.46±0.96	
こどもは意外な行動や考えを持っている		4.11±0.84	3.88±0.90	> *	4.21±0.72	3.96±0.85	> **
こどもは興味、好奇心が旺盛		4.46±0.65	4.40±0.68		4.61±0.51	4.37±0.67	> **
こどもは集中している時間が短い		3.84±0.94	3.85±0.94		3.85±0.90	3.85±0.86	
こどもは感情がはっきりしている		4.04±0.90	4.18±0.80		4.11±0.77	4.19±0.84	
こどもは気分が変わりやすい		3.91±0.81	4.23±0.70	< **	3.86±0.88	4.18±0.84	< *
こどもは年齢によって全く違う		4.10±0.94	4.55±0.63	< ***	4.24±0.84	4.60±0.66	< ***
こどもはこどもなりの意志や考えを持つ		4.43±0.74	4.45±0.55		4.51±0.59	4.55±0.55	
こどもは遊びが大好き		4.41±0.67	4.65±0.55	< **	4.48±0.63	4.51±0.55	
こどもには想像力がある		4.19±0.61	4.14±0.70		4.25±0.62	4.08±0.71	
こどもは愛情を持って接すると通じる		4.13±0.75	4.38±0.68	< **	4.26±0.75	4.38±0.69	
こどもは大人が導いてやらなければいけない		3.33±0.79	3.41±0.75		3.38±0.91	3.60±0.93	
こどもが好き		3.99±0.92	4.29±0.71	< ***	4.18±0.91	4.41±0.75	< **
こどもは楽しい		3.96±0.84	4.29±0.73	< **	4.10±0.86	4.32±0.72	< *
こどもはおもしろい		4.20±0.78	4.34±0.69		4.20±0.84	4.35±0.71	< *
こどもはうるさい		3.83±0.83	3.17±1.00	> ***	3.86±0.79	3.60±1.05	> *
こどもはこわい		2.38±1.04	2.37±1.21		2.75±1.14	2.58±1.22	
こどもといると疲れる		3.21±0.98	2.79±1.01	> ***	3.15±0.98	2.76±1.01	> ***
こどもは苦手		2.60±1.00	2.18±0.92	> ***	2.50±1.00	2.28±0.95	> *
こどもは嫌い		2.05±0.85	1.71±0.71	> ***	1.80±0.81	1.65±0.76	
こどもの笑顔にはほっとさせられる		4.14±0.72	4.49±0.79	< ***	4.30±0.79	4.41±0.59	< **
こどもが泣いているとどうしていいかわからない		3.31±1.02	3.03±1.04	> *	3.31±1.03	3.05±1.04	> *
泣いているこどもは何か訴えている		4.19±0.67	4.40±0.68	< *	4.25±0.60	4.46±0.64	< *
こどもに嫌われたら困る		3.73±1.05	3.60±0.97		3.37±1.07	3.18±1.03	
こどもに嫌われてもまたトライしてみる		3.58±0.76	4.13±0.71	< ***	3.83±0.72	4.14±0.66	< ***
こどもがいるとまわりが明るくなる		3.95±0.67	4.14±0.74		4.15±0.73	4.16±0.76	
こどもにとって母親はかけがえのない存在		4.83±0.38	4.85±0.36		4.83±0.37	4.73±0.44	
こどもにとって父親はかけがえのない存在		4.59±0.61	4.46±0.63		4.55±0.55	4.28±0.69	> **
こどもにとって母親は大きな存在		4.88±0.33	4.89±0.32		4.84±0.37	4.80±0.40	
こどもにとって父親は大きな存在		4.56±0.77	4.54±0.61		4.61±0.56	4.38±0.67	> **
病気のこどもはかわいそう		4.34±0.74	4.06±0.87	> ***	4.28±0.65	4.11±0.86	
病気のこどもはがんばっている		4.28±0.66	4.39±0.68		4.34±0.61	4.45±0.66	
病気のこどもはおとなしい		2.63±0.78	2.13±0.79	> ***	2.76±0.73	2.51±0.95	> *
入院しているこどもは遊べなくてかわいそう		3.85±0.87	3.55±1.01	> *	3.71±0.85	3.46±1.15	

非常にそう思う：5点 まあそう思う：4点 どちらともいえない：3点

あまりそう思わない：2点 まったくそう思わない：1点

t検定またはWelchの検定：* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

表5 学生が実習で関わる人に対する不安と難しさ

対 象 者 \ 程 度	実習前「関わりが不安」					実習を通して「関わりが難しかった」				
	非常に そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	非常に そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない
受け持ち児	38	73	19	28	2	9	48	14	62	21
受け持ち児の母親	45	59	22	24	0	9	25	19	73	28
病棟の看護婦	44	60	26	27	3	10	26	40	60	18
受け持ち児の医師	14	45	44	47	10	12	22	47	49	22
指導教官	12	38	43	56	11	0	5	20	62	64

(数字：人数)

表6 受け持ち児に対する不安あり群と不安なし群によるこどもに対するイメージの違い

イメージの項目 \ 実習前の受け持ち児との 関わり	不安あり群 n = 111	不安なし群 n = 49	平均値の 差の検定
こどもは小さい	4.10±0.74	3.79±0.87	>*
こどもは年齢によって全く違う	4.30±0.82	3.88±1.01	>*
こどもはこわい	2.69±1.14	2.27±1.00	>*
こどもは苦手	2.72±0.99	2.16±0.92	>**
こどもが泣いているとどうしていいかわからない	3.55±0.96	2.78±0.99	>***
こどもに嫌われたら困る	3.80±0.96	2.98±1.11	>***
こどもにとって母親は大きな存在	4.90±0.30	4.76±0.43	>*
病気のこどもはかわいそう	4.41±0.64	4.06±0.78	>**

非常にそう思う：5点 まあそう思う：4点 どちらともいえない：3点

あまりそう思わない：2点 まったくそう思わない：1点

t検定または Welch の検定：* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

6. 実習中に関わる人に対する学生の実習前の不安と実習後の認識について

学生が実中に関わる主な人に対する実習前に学生が感じる不安の程度と実習全体を通して感じた関わり方の難しさの程度についてを表5に示した。

実習前は半数以上の学生が受け持ち児とその母親に対しての関わり方の不安を「非常にそう思う」または「まあそう思う」と答えていたが、実習後に聞いた「実習全体を通して関わり方は難しかった」については、半数以上の学生が受け持ち児とその

母親に対して「全く思わない」または「あまり思わない」と答えていた。

7. 学生の不安、認識とこどもに対するイメージについて

実習前に尋ねた「受け持ち児との関わり方は不安」に対して「非常にそう思う」「まあそう思う」と答えた学生（以下不安あり群とする）と「どちらともいえない」「あまり思わない」「全く思わない」と答えた学生（以下不安なし群とする）に分け、実習前のこどもに対するイメージの比較を表6に

表7 受け持ち児との関わりの困難群と非困難群によるこどもに対するイメージの違い

イメージの項目	受け持ち児との 関わり	困 難 群 n=57	非 困 難 群 n=97	平均値の 差の検定
こどもが好き		4.16±0.86	4.46±0.63	<*
こどもはおもしろい		4.19±0.77	4.44±0.65	<*
こどもはうるさい		3.65±1.01	3.22±1.05	>*
こどもといると疲れる		3.07±1.00	2.60±1.06	>**
こどもは苦手		2.44±1.04	2.10±0.86	>*
こどもは嫌い		1.88±0.80	1.57±0.68	>*

非常にそう思う：5点 まあそう思う：4点 どちらともいえない：3点

あまりそう思わない：2点 まったくそう思わない：1点

t検定または Welch の検定：* $P<0.05$ ** $P<0.01$ *** $P<0.001$

表8 受け持ち児との関わりの困難群と非困難群による受け持ち児の平均年齢

イメージの項目	受け持ち児との 関わり	困 難 群 n=57	非 困 難 群 n=97	平均値の 差の検定
受け持ち児の平均年齢（歳）		5.43±4.88	2.97±3.49	>***

Welch の検定：*** $P<0.001$

示した。「泣いているとどうしていいかわからない」「嫌われたら困る」「苦手」「こわい」など8項目において不安あり群の方が有意に得点が高い結果であった。

同様に、実習後に尋ねた「実習全体を通して受け持ち患児との関わりは難しかった」に対して「非常にそう思う」「まあそう思う」と答えた学生（以下困難群とする）と「どちらともいえない」「あまり思わない」「全く思わない」と答えた学生（以下非困難群とする）に分け、実習後のこどもに対するイメージを比較したものを表7に示した。困難群では「こどもといると疲れる」「うるさい」「苦手」「嫌い」の4項目において、非困難群では「好き」「おもしろい」の2項目において有意に高かった。また、困難群の方が非困難群より受け持ち患児の年齢が高い結果であった（表8、 $P<0.001$ ）。

IV. 考 察

実習前後のイメージの比較から、学生は実際にこどもと接することでより肯定的な見方をしていることがわかる。病気のこどもについてはがんばっていると感じ、またおとなしかったり遊べないとは感じなくなるなど、病気だからといって健康なこどもと変わらないこどもらしさがあるということは、入院しているこどもと接して初めて実感することである。父親の存在について実習後の方がその大切さを感じなくなっていたが、実習が平日の日中のみであるため父親と接する機会がほとんどないためと思われる。付き添いの有無で見ると付き添いのない病棟において実習前後でこどもにとって父親の存在の感じ方が弱くなっていた。付き添いのある病棟では付き添いをしている母親を介して留守宅における父親の活躍を感じる場面があるが、付き添いのない面会制の病棟では学生が

親と関わる時間が短時間であり家族全体まで深めることが難しいのではないかと考える。

受け持ち患児の年齢によって実習後のこどもに対するイメージに違いがみられたのは、実習前は「こども」という漠然とした対象のとらえ方をしていた学生が、実習中に受け持った患児を通して乳児、幼児、学童の特徴を実感できたためと考える。生活の刺激をほとんど受動的に受ける時期の乳児や何でも真似をしたがる時期である幼児期、苦痛や嫌悪を大人と同じように言葉で伝えることのできる学童など年齢による実習後のイメージの違いはこどもの発達段階を見事に反映している。

付き添いの有無別の実習前と実習後のイメージでは、実習後により感じるようになった項目、感じなくなった項目に違いがあったが、実習環境の違いで述べられるのは前述した家族のとらえ方のみであり、「嫌い」「わがまま」などの項目についてはそれぞれの病院で実習を行った学生の特性ととらえられるのではないだろうか。

今回、学生にこどもや母親との関わりについて実習前の不安な気持ちを尋ねたが、学生の多くは自分が関わる人全般に対して不安な気持ちを持っていることがわかった。学生は一般社会の中で同世代以外の人と接する機会が少なく、加えて今まであまり経験したことのない看護場面に関わることに慣れていない。それらの術を知らない為に、学生はこれから関わる人との関わりを不安に思うのではないかと推測される。そして、より不安に

思っている学生がこどもに対してこわい、疲れる、嫌われたら困るなど否定的な感情を強く持っていることがわかった。

実習を通して受け持ち児との関わりが難しかったと感じた学生は、こどもに対してうるさい、苦手、嫌いなどの否定的な感情を強く持っており、実習体験がこどもに対するイメージに影響を及ぼしていることが明らかになった。また、これらの学生が受け持った児の平均年齢は高く、年長児は幼児のように遊びで気を紛らわせたり、乳児のように学生のペースで援助を行えないことなどから困難を感じやすいと思われる。

今後、学生の不安や困難さについて詳しく知り、学生の実習体験などとの関係をみていく必要があると思われる。

本論文の要旨は、第14回日本看護科学学会において発表した。

引用文献

- 1) 内田雅代, 桜井幸, 中村美保, 兼松百合子, 吉武香代子, 武田淳子: 小児看護実習前, 実習後のこどものイメージについて, 千葉大学看護学部紀要, 第11号, 47-51, 1989
- 2) 内田雅代, 古谷佳由理, 兼松百合子, 中村美保: 小児看護実習における学生のこどもに対するイメージの変化について, 千葉大学看護学部紀要, 第15号, 35-43, 1993